

創刊に寄せて

『防衛研究所戦史部年報』の発刊を祝して

伊藤 隆

このたび『防衛研究所戦史部年報』の発刊に当たり、軍事史学会会長として、また日本近代史研究者として、心から敬意を表したい。軍事史学会として戦史部の後援を得る事大であり、また個人の研究者として、戦史部の膨大なエネルギーの結集である『戦史叢書』及びその基礎になつた大量の史料に依拠したことの大であった。

個人的にいふと戦史部との関係は故西浦進戦史室長の時代からだから、随分古い事である。木戸日記研究会で西浦氏の聞き取りをした際に、西浦氏に頼んで、岡義武東京大学法学部教授等一行が當時市ヶ谷台にあつた戦史室を訪問して、見学させて頂いたが、それは昭和四十二、三年の頃で、充実した内容と設備の良さに強く感心した記憶が鮮明である。その後部員の野村実氏と親しくなり、史料を見せて貰いに、今はもう跡形もない古い木造の建物の戦史室を何回か訪れた。また昭和五十三年の戦史部研究発表会で「軍部史研究の諸問題について」と題する特別講演を、

この時もまだ市ヶ谷であつた戦史部でさせて頂き、また昭和六十一年には、この時には目黒の現在の講堂であったが、戦史研究発表会におけるパネル討議「太平洋戦争の再考察」にパネラーの一人として、本間長世、岩島久夫両氏と共に発表（コメンテーター・萩原延寿、コメンテーター兼司会・秦郁彦）し、その後も御案内を頂き、時々参加させて頂いている。

戦史部が一つの研究組織としてこれまで『紀要』を持たなかつたことが不思議ともいえる。発表機会を持つ事によるこれから的发展に大きな期待を持っている。古今東西の戦史・広く安全保障をめざす国内・国際組織に関する研究の成果が次々と発表される事を期待したい。また戦史部が隨時行っている研究会やシンポジウムの記録等もこの『年報』を通じて報道され広く学会に寄与する事になるであろう。それとともに、私が特に期待したいのは、『大東亜戦争戦史叢書』が刊行を終わって既に十八年を経過しており、その間に多くの新しい史料の発掘やそれに基づく研究の結果、訂正や追加を要する事項も少なくないと思われる。その全

体的な見直しをこの「年報」で継続して頂きたいという事である。同時にその時やそれ以後収集した貴重な史料等で、当時は遺族との関係で公表できなかつた史料を、遺族との交渉をして、この「年報」誌上で紹介し続けて欲しいという事である。

本「年報」の発刊が戦史部の新しい展開を導く事を祈念するものである。

(政策研究大学院大学教授・軍事史学会会長)

創刊に寄せて

森松 俊夫

昭和三十三年春から、私は陸上自衛隊幹部学校の戦史教官になつた。

そのころ戦史教官室では、戦史室の研究成果を逐次頂戴して、本邦戦史を教科目に組み入れ学生教育を実施しようとしていた。このために私は、当時芝浦海岸にあつた戦史室に入りしたのが戦史室との御縁の始りである。結局、戦史室長以下関係編纂官の方たちが熱意をもつて学生教育に当られ、私たちはその講義録で教程を作り、爾後の教育を継承していくつた。

三十八年夏、私は戦史室に転任し、戦史編纂業務の一端を担任した。やがてその成果は戦史叢書として逐次刊行されたのであるが、四十年代に入ると、反戦反軍的であった世間の風潮も変り、この叢書は高い評価を受けて戦史研究熱を高める実効があつたと思う。

叢書刊行が進捗し将来の見通しが推定されるようになると、その終末

指導と戦史室の将来構想が問題になつてきた。戦史室の基本任務のうち、編纂以外の「調査研究」は未着手であつたが、これを主な使命とすることについて、重要性・必要性の認識に相違があり、それに応ずる組織体をも含め長い歳月の検討を経て、戦史部が誕生することになった。

戦史部は新鮮な若い力で新分野の調査研究に打ち込んでいた。私はそのころ、戦史部内に臨時に設けられた編纂室にて、戦史叢書の追加分の編纂支援、および長期間にわたる正誤表の継続的な作成、史料集の作成と刊行、史料収集ならびに図書館内未整理資料の整備等を処理していたため、調査研究に専念できたのは調査員になつてからであつた。

この間、戦史部の一部であつた図書館が突如として分離し指揮系統の変更があつたときは、研究所の利用が不便になり、困惑した。

私は、戦史部は退職したが、研究には定年はなく、ある団体の小さな文庫を運営しつつ、さやかな研究を進めている。部外に居て一番困るのは史料の不足であつて、手持ち史料では少な過ぎるし、よその図書館通いも多くの制約があつて、新鮮な論文が書きにくい。したがつて、価値の高い豊富な史料を随意使用できる日黒時代は良かつたなど懐がしんでいる。

また所員の研究成果は、部内配布の「研究史料」となりたいへん価値あるものであつたが、今、私どもは「軍事史学」や「研究発表会」でその一部は勉強させてもらつていて。今回、「戦史部年報」が出されることになり、今までよりも実に広い範囲に、研究成果や戦史部の動静が公表されることになり喜ばしく思つてゐる。

明治・大正・昭和初期といつても戦史室時代からみれば「つい先頃」のことであったが、今の現代人から見れば遠い昔の感じであろう。そして即効性、実用性のある研究成果を要望されよう。私たちは、その要望にも応じねばならぬが、またアカデミックな研究も続けねばならないと思う。

『戦史部年報』発刊を祝す

近藤 新治

(元戦史編纂官)

私は、昭和四十一年三月の異動で戦史編纂官発令、五十六年四月定年退職認証ですから、丁度十五年、戦史部にお世話になつたことになります。

この時期は戦史叢書の第一巻『マレー進攻作戦』が発刊され、第一〇二巻『陸海軍年表』が終刊された時期にほぼ一致します。そこで当初私に与えられた任務は、南東方面の陸軍作戦全五巻の編纂でした。この仕事は面白く、毎日々々實に愉快に仕事をさせていただきました。

内容は五ヶ師団基幹の方面軍の戦史ですが、机を並べて指導をうけた原四郎さんが、その方面軍の作戦參謀であり、各師団、軍ともキーパーソンは生存されていて、基本的な問題で資料的に苦労したことはあります。ただ支隊等独立行動したものは、米濠側の資料を発掘し考証する必要があつたことと、連隊以下の実相特に真の戦場心理については、注意して資料を集めたことを記憶しています。

十年目位から、戦史叢書刊行終了後の戦史室の待遇が話題になつてきました。全般的な大蔵、行管向けの作業は前原透さんが企画班長として苦労されていましたが、何といつても広範囲な問題なので、海の市来俊男さんと共に手伝いをしました。当時の部厚い「戦史室将来構想」という綴を見ると、感慨深いものがあります。

戦史室定員を一名も削除することなく改編する、という決定を聞いてきた市来さんと、「今日は飲みましょう」と手をとり合つて喜んだことを覚えています。

当時考えられていた問題点は、大要次のようなものです。(順序不同)

一 大東亜戦史ばかりを専攻してきた戦史室が、外国戦史を研究し得るか。

二 陸大、海大の戦史研究の延長のよくなかたちでまとめた戦史叢書の方法論は適当であつたか。

三 自衛隊の教育訓練に役立つ戦史研究とは、どういうものか。

四 理論と実際と実学との関係。

五 戰史と軍事史学会(防大)との関係。

六 軍事史、軍事学、軍事政策の関係。

七 作戦戦闘史と戦場心理、幕僚勤務。

八 軍事史研究の姿勢は、「勝負の世界」を扱い得るか。

九 戰史は学問でなければならないか。現実の状況に即し、どう考えたかを追求する軍事政策の一分野ではないか。

十 軍事史と西洋史、東洋史とどこが違うか。政治思想史、外交史と

の差違。

十一 戦史の独断場（戦争の本質、戦闘の実態、戦争の諸事象の説明、追体験）

もう二十年も前に考へていたことです。何でこんな自明の理に悩んでいたのかと、進歩した現在から見ると、お笑いになるような事柄ばかりでしょう。

与えられた紙数がなくなりました。ともかくこんな段階から、「年報」が出せるまでに成長したのです、戦史部は。

心から、お喜び申し上げます。

（元戦史編纂官）

創刊に寄せて

野村 実

研究生活の日々は、苦しみと喜びが鎖のようにつながっている。ほかの仕事のように、労働時間と余暇を明確に区別できない。

その時々の研究テーマが二十四時間、頭から離れることがない。苦しみの輪となる。そして、ひらめきがあつて真相が見えたり、執筆した文章が活字になつたりすると、うれしい。喜びの輪となる。

このような生活を、四十年近く過ごしてきた。

防衛研修所・研究所（戦史室・戦史部）で二十余年、防衛大学校で五年、現在の愛知工業大学で十年余の、教育を含む研究生活である。自身とその時の同僚研究者の研究成果が財産となり、今後の研究が進展して

いく。

「戦史室」時代の最大目標は「戦史叢書」の刊行にあつたので、自身と同僚の成果は、一見するだけで明白である。

防衛大学校時代のそれは、同校の「教官研究要録」（年報）によつて明らかとなる。愛知工業大学時代のは、同じく同校の「大学研究報告」（年報）によつて判明する。

これらの研究成果を記した冊子は、私の書棚でもつとも大切なものとなつていて。

「戦史部」時代の自身の研究成果は、私が作成したリストによつてわかるが、同僚研究官のそれは記憶に頼ることになる。戦史部を離れてから時間が流れないので、現在では研究官の名前と顔が一致しないことが多いなつた。

まして、研究官のそれぞれの研究テーマについては、親しい友人のほかはわからなくなつてしまつた。ごく最近も、何度も読んだ論文の筆者は、一般の大学で修士課程か博士課程を終えたシビルの若い研究官だと思っていたのに、老練な一佐だと知つて驚いた経験がある。

このたび「戦史部年報」が刊行されることにより、国家としての貴重な史料（防衛庁のためだけの史料ではない）を保持する戦史部の重要性が、改めて国内・国外で再認識されると思う。

西洋文化は、分析的・論理的な側面を多くもち、アジアの文化は、総合的・感情的な側面を多くもつ。日本で、実証的に歴史を考えようとの土壤は、第二次世界大戦後に豊かになった。未来に向かつて、西洋文化

とアジアの文化は融合しなければならないが、西洋に根をもつ民主主義の基本は、税金の使われかたの「透明性」にあると言える。

この「透明性」のためにも、「戦史部年報」は役立つと期待されよう。

(愛知工業大学客員教授・元第二戦史研究室長)

「戦史編纂官」の情熱

波多野 澄雄

昭和五十四年四月、私は市ヶ谷台の片隅にあつた防衛研修所戦史部で研究者としての第一歩を踏み出した。大学院出の研究職が戦史部に入所するのは最初であったが、戦史部長の梅博氏は、とくに注文もなく、泰然自若として私の指導は所員や戦史編纂官に任せているという風であった。配属となつた第一戦史研究室は岩島久夫室長のおおらかな性格のもと、それぞれの研究生活を楽しむという雰囲気で、すぐに馴染むことができたのは幸運であった。一室の世話役であつた熊谷光久所員や、筆頭所員格として「官庁ヒストリアン」としての心構えを教わった友田潤一郎所員の発案で、桜や梅の季節のたびに史跡めぐりや飲酒会が企画されるなど、業務を離れてなごやかで楽しい日々であった。

第二戦史研究室は、一室と違う趣があつた。野村実室長をはじめ戦史編纂官たちはいずれも旧軍のエリート将校であつたが、太平洋戦争に関心のある私に旧軍時代の体験やら研究成果を押し付けがましく語るといふことは一度もなかつた。思考回路は合理的で精神主義に陥らず、市民的教養と適度な国際感覚を持ち合わせ、想像していたイメージとはかな

り違つていた。そして何より戦史編纂に対する情熱にあふれていた。

ところで、私が戦史部入所を切望するにいたつたのは、何よりも「太平洋戦争への道」(全七巻)と「戦史叢書」に触発されたことによる。昭和三〇年代の創設間もない戦史室では、西浦進室長の「庇護」のもとで、元大本営参謀・稻葉正夫という「伝説的」編纂官が中心となつて、部外の若手学者を集めて研究会をもち、軍事知識を授ける傍ら、整理の途中にあつた史料を惜し気もなく閲覧させ、その成果がある「太平洋戦争への道」であつたという。ある人はこれを「稻葉教室」と呼んでいたようであるが、戦史室の勇断と協力がなければ「太平洋戦争への道」の水準の高さは維持できなかつたことは確かである。

ともかく戦史室の歴史研究に対する開かれた姿勢は「戦史叢書」にも脈々と受け継がれていることは、入所後に改めて感じたことであつた。「戦史叢書」の編纂業務にかかるることはなかつたが、一〇年間に一〇〇冊刊行という、すさまじいエネルギーと情熱の一端を垣間見ることができた。とくに、私が接した森松俊夫氏、近藤新治氏、不破博氏、野村実氏、市来俊男氏、生田惇氏ら編纂官の戦史研究に対する志しの高さには何か心が打たれるものがあつたが、それだけに史料の部外への提供・公開、成果の交流という点には心を碎かれていた。しかし、防衛研修所の組織が整備されるに従つて、彼ら編纂官の意に反して、それはむずかしくなつて行つたように思われる。戦史部図書館に限らず、官庁の資料館には公開基準の厳密な適用が求められ、私文書が多い戦史史料の場合には皮肉にもその公開が却つて阻まれることになつたからである。昭和三〇

年代の「稻葉教室」は、組織の点でも公開基準の点でも未整備の時代であつたからこそ可能であったとも言えようか。それでも、大半の「戦史叢書」の末尾には所在情報的な「脚注」が付されているのは、編纂官の精一杯の抵抗であつたように思われてならない。

私が戦史部を去つてから、部内職員の努力によつて私文書の公開が着実に進展し、「機密戦争日誌」のように、扱いが不透明であつた第一級資料類も閲覧が可能となつてきたことは何よりも嬉しい。戦史部在職の九年間は、経験豊かな編纂官や所員に交じつて研究の上で貢献できるとは考えていいなかつたが、条件が整えば率先して着手したいと思つていたことが二つあつた。その一つは重要資料の刊行事業であり、もう一つは詳細な資料目録の作成と公開であつた。前者は在職中に「海軍年度作戦計画集」などの企画段階に参加できることは幸いであつたが、後者については、在職中はなお時期尚早であつた。地道ではあるがこれら事業の積み重ねがやがて大きな果実をもたらすように思われる。

(筑波大学教授・元戦史部所員)

戦史部一大飛躍への期待

高橋 久志

このほど庄司主任研究官より「戦史部年報」の企画・出版の話を聞くに及び、我がことのように嬉しく思つてゐる。この出版計画は、私が第一戦史研究室長であつた頃より彼が中心となつて暖めていた考え方であり、如何せん、予算の関係から実現が遅れていたが、辻川戦史部長の強力な

御指導と熱烈な御支援により、やつと念願が叶つた次第である。

戦史部にとり、こうした年報を毎年出版して世に問うことは時宜に叶い、極めて適切かつ、建設的なことである。戦史部は、個人研究の成果や戦史方面の主要著作物の翻訳等を「調査研究資料」として、これまでかなりの種類を出してはいるが、予算の面で印刷部数も厳しく制限され、しかも、内部資料としての性格から、防衛庁・自衛隊の組織内でせいぜい一〇〇部に満たない数が隨時配布されている限りである。また、二、三年前に企画室が主導権を取つて発刊された緑色の表紙のリサーチ・ペーパー・シリーズ「防衛研究」も配布対象は部内向けであり、主として現代の安全保障や防衛問題に焦点が絞られている。それに、防衛研究所全体を扱つた年報が数年間にわたつて印刷・配布され、歴史関係の論文がほんの一部掲載されたことがあるが、現在は廃刊となつてゐる。かくして戦史部の諸々の研究活動や執筆の実態を知る手立ては、これまで世に出てゐる出版物では市ヶ谷の戦史室時代に出版した一〇二巻の「戦史叢書」と史料集の続編以外に、防衛庁の外から見たら殆ど無きに等しいという誠に寂しい限りであつた。もちろん戦史研究発表会も夏の恒例行事となり、外部の参加者で毎年講堂が溢れんばかりである。また、戦史部所員は、業績の一端を時折学会誌(特に「軍事史学」等)の論文や学術書等(最近注目を集めたものでは「近代日本戦争史」「日本海軍史」「日本陸海軍事典」)の形で屢々世に問うてはいる。しかしながら、戦史部の研究活動の全体像は、外部の人にはこれまでようとして分かりにくかつた。

私の場合、平成八年三月末日をもつてまる一四年間勤めた防衛研究所を退職し、以来母校の上智大学で教鞭をとりつつ、幸いなことに防衛研究所で継続して客員研究員の身分を与えられている。しかし、今回防衛世間が戦史部そのものの存在や業績について無知であるかを改めて知つて愕然とすると共に、近い将来戦史部が果たすべき役割りの大きさをつくづく痛感している。

日本の大学では、未だに戦争史研究は正規の学問の対象としては見なされておらず、日本広しと言えども、こうした講座はどこにも設けられてはいない。しかも、国際政治史や国際関係論等の隣接分野はもちろんのこと、日本近現代史においても、欧米諸国に比べると、戦争史の本格的な研究は大きな遅れをとっている。また、高校までの教育や大学入試

の現状から言つても、学生の戦争史や戦争研究に対する関心も当然のことながら低い。かくして我國では近年とみに戦争研究を避けて平和を論じる傾向が殊のほか強く、非常識が常識として堂々とまかり通つてゐる場合が多い。

こうした風潮を少しずつ改善していく上でも、戦史部は内向きではなく外に向けた情報の発信源として、これまで以上にその活躍が期待されているのである。

もう一つ、戦史部に大いに期待される分野がある。私事となつて恐縮だが、現在に到るまで私が直接関与している業績に、海外の戦史研究者との交流がある。これは平成六年度に米陸軍戦史研究センターのエド

ワード・ドレイ博士を招聘したのを皮切りに、翌七年度にはオーストラリア国防士官学校のステュワート・ローン博士と元米空軍戦史部長(Chief Historian)のスタンレー・フォーク博士が、八年度には、カンザス大学名誉教授のグラント・ゲッドマン博士と南カリフォルニア大学のロジャー・デイングマン教授が、そして今年の九年度にはノースカロライナ大学のゲルハルト・ワインバーグ教授と米海軍歴史センターのエドワード・マロルダ博士が来日し、戦史部で研究会を開催している。

こうした国際交流もやはり辻川戦史部長による強力なバック・アップがなければ不可能なことであったが、今後はこれまでの着実な実績をバネにして、是非とも近い将来において戦史部主催の戦史研究国際シンポジウムを開催して欲しい。

(上智大学教授・元第一戦史研究室長)

比較史と外国戦史

赤木 完爾

昭和五十五年から十年間戦史部に勤務した。戦史叢書の刊行事業がほぼ終了し、戦史室が戦史部に改組されて日黒に移転した年に採用された。戦史部においては波多野澄雄氏(現在筑波大学教授)について二人目の文官研究職員であった。平成二年に図らずも大学に転ずることになったが、顧みて戦史部での十年間は実によく仕事もでき、愉快に研究を進めることができた年月であったと感謝している。採用が決まって、引越し直前の市ヶ谷台の府舎に当時の梅博戦史部長を訪ねた。往事茫々たるもの、

かの温顔を忘れるがたい。

戦史室の業務として取り扱う時代は支那事変以降であったのが、戦史部への改組の前後から内国戦史の研究についてはほぼ戊辰役以降という理解となり、またそれまで戦史叢書の編纂と執筆への直接的な関連から「対抗戦史」という表現で研究されていた外国戦史は第二次世界大戦に関するものにとどまっていたが、その対象とする時代も必要性さえ明らかであれば前後に延伸できることになった。

大学では政治外交史・国際政治史を専攻していた。若い頃から戦史を読むのが好きだったのだが、政府が公刊する戦史というジャンルがあるのを最初に知ったのは、実は英語の書物からである。第二次大戦のイギリスの「大戦略」シリーズであるとか、アメリカ陸軍のグリーンバックシリーズ（布背表紙の色がグリーンであることからこうした呼び方をするらしいが、これは後に戦史部で習つた）、それに事実上の公刊戦史であるモリソンの「合衆国海軍作戦史」である。ほどなく戦史叢書の存在を知ることになり、日本も文明国だと密かに安心した記憶がある。

戦史部に勤務している間、概ね外国戦史研究に明け暮れた。戦争や軍事の歴史は、勝負という明確な結果の出る戦場における彼我の接触と、それに至る様々な経緯を中心的に扱うものであつてみれば、もともと諸外国の軍事的事象との相互の影響を無視できるものではない。けれども外国の研究者と同等の水準でその国についての研究を進めることは、まず史料や言語の面で大きな困難がつきまとい、さらに研究を直截な形で意義づけることが必ずしも容易ではない。

しかし個人においても組織においても、研究を独善的にしないためには、何より比較の問題意識を持つことは重要である。「空間的に隣接していると同時に、同時代のものであり、相互に絶えず影響を与えあっており、発展の過程において、少なくとも部分的には共通の起源に遡りうる（M・プロック）」ような事例に富む、約言すれば「近接性と同時性」を備えた外国戦史は、日本の戦史研究のために、比較の視点を常に提供し続けることが期待されるのである。戦史の研究にあっても、その領域の中のごく狭い専門分野の読書しかしない人には既存問題の解釈はできても、真の問題発見の機会はない。

（慶應義塾大学教授・元戦史部所員）